



今泉今右衛門家の鬼瓦 (写真は景観カタログ外部編より)

鬼瓦

鬼瓦は、有田内山の歴史的景観をつくる要素の一つです。鬼瓦は家の守りや福を招くものとして、棟の両端部に鎮座しています。それぞれの家の個性的な表情をつくりだし、瓦の中でもこれほどよく知られたものはありません。

鬼瓦には大きく分けると、様々な表情を持った鬼の顔、桃の形、きんちゃく、鶴亀、大黒様といった動植物や縁起物を造形したものと、家紋や商標を取り入れたものがあります。特に鬼面をした瓦は、鬼面文鬼瓦といって古く統一新羅(676年～892年)で生まれ、日本の鬼瓦の母体となっています。

鬼面文鬼瓦は朝鮮半島に近い北九州から関東、東北にいたるまで各地域で見ることができます。高い所から激しい形相で下界に睨みをきかせ、人目をひくことでは、まさに瓦の花形役者といったところではないでしょうか。

皿山びとの歌

有田町歴史民俗資料館報

No.30

高原五郎七



「文化と伝統」。この崇高で威厳のある言葉も、最近、妙に軽々しく感じてしまうのは私だけでしょうか。それほど、一種の隠れた流行語としてちまたに氾濫しています。

この文化や伝統が形成される背景には、必ずそこに生きる人々の時間や空間を超えた努力や叡知の積み重ねがあります。有田も例外ではありません。有田の個性は、まさにこの「文化と伝統」によって育まれてきたのです。

今回は、この有田の文化や伝統の骨格を作った立役者を、高原五郎七という人物を中心に綴ってみたいと思います。

現代の日本の社会で、焼き物に全く関わらずに過ごすことはほとんど不可能です。特に磁器は、日常の食器として、あるいはインテリアとして、その他様々な分野で私たちの暮らしにゆとりや利便さを与えてくれます。

しかし、この磁器という素材は、もともと現在のように日本中で生産されていたわけではなく、全ての源は有田付近から始まります。つまり、有田磁器の創始者、すなわち、日本の磁祖というわけです。

しかし、その創始者探しはそう簡単ではありません。実は、古文書に磁器の創始者と記された人物が、3人も存在しているのです。金ヶ江三兵衛と家永正右衛門、そして第3の男、高原五郎七です。これをどう解釈したらよいのか、現在ではまだ結論は出ていません。この中の1人かもしれませんし、3人手を取り合ってもかもしれません。あるいは、3人とも何かの思い違いかもしれません。

五郎七の事跡をたどってみることにしましょう。彼の登場する主な文献には「酒井田柿右衛門家文書」や「今村氏文書」、「副田氏系図」などがあります。それによると五郎七の素性は、筑前出身説、朝鮮半島出身で豊臣秀吉に仕えた焼き物師説、京都の浪人説などがあり、ほとんど支離滅裂という状態です。しかし、共通するのは、彼が高度な陶技を備えてお

り、各地を転々としたという記述です。

『酒井田柿右衛門家文書』によると、五郎七は元和3年(1617)に有田の南川原を訪れ、付近の川に明礬(みょうばん)が流れているのを見つけたと記しています。明礬(みょうばん)は陶石や磁土にも含まれているため、「川上に上質の土があるのでは」と考え、川筋に沿ってさかのぼり、泉山に白土があるのを発見したと言います。そしてこの土で試してみたところ、磁器が完成したと記しています。

ここで話が終われば、五郎七は最強の有力候補かもしれません。当時ほとんど人が住んでいなかったという内山の状況を考えれば、川で明礬を発見してというのは、ありえないこととは思えません。

しかし別の文献では、五郎七はこれとは全く異なった場所に、全く異なった功労者として登場します。それは、『副田氏系図』に記された内容で、五郎七が有田で訪れたのは岩谷川内と書かれています。そして青磁を発明して献上を行い、御道具山(後の藩窯)の基を築いたとしています。ちなみに、この青磁の発明に関しては、『今村氏文書』では、寛永3年(1626)に南川原で初めてできたとしており、完全に食い違いがみられます。ただし、元和10年(1624)には、すでに鹿島藩主鍋島忠茂が青磁染付の茶碗を注文している記録があり、寛永3年説も素直に納得できるものではありません。

『副田氏系図』によれば、五郎七はキリシタンであったため、取り締まりの噂を聞き、夜陰に紛れて逃亡、行方不明になったと言います。江戸時代には、キリスト教は封建倫理と矛盾するため、厳しく取り締まりが行われました。佐賀藩内でも寛永11年(1634)に大掛かりなキリシタンの捕縛が行われており中には火あぶりになった人もいました。

『今村氏文書』によれば、有田から逃亡した五郎七はまず上方を訪れ、四国の土佐で一時期過ごした後、最後は大阪で亡くなったと記しています。

五郎七は、こうした数々の矛盾や謎の多さから一時架空の人物とされたこともありましたが、磁器創始の候補者としては、今ではそれほど重要視されていません。磁器の創始や御道具山の創始は、有田にとっては画期的なできごとです。ここに突如として登場し、こつぜんと消えた五郎七。たんに架空の人物と割り切るには、あまりにも人間臭さが漂います。

(村上 伸之)

海の中の有田焼

(1)有田焼と「海の道」

江戸時代の有田焼は、積み出し港の名にちなんで「伊万里」と称されていました。鉄道・道路網が発達した現在では伊万里港から積み出すことなく陸上輸送していますが、かつては陶磁器のように重くてかさばるものを、安全に、かつ大量に運ぶには水上輸送が適していたのです。

長崎から東南アジア、南アジア、西アジア、アフリカ、ヨーロッパへと有田焼を運んだ手段もやはり船でした。しかし、海にもまた海の危険があります。嵐に巻き込まれることもありますし、他の船に襲われることもありました。そして、少なからず船は沈没しましたし、または沈没を避けるために積み荷を投棄することもありました。

(2)浜辺に打ち上げられた有田焼

そうして海に沈んだ有田焼が、浜辺に打ち上げられることもあります。例えば鹿児島県の吹上浜では、1650～1660年代を中心とした肥前磁器が採集されています。

これらの中には東南アジアで類品が出土しているものも多く、東南アジアなどの南方向けの船が何らかの事情で積み荷を海中投棄した可能性が考えられます。例えば『磁器とオランダ連合東インド会社』（フォルカー著）には「1664年 6月 6日の出島台帳には長崎からアモイに向かった小さなジャンク船が悪天候のため、やむなく多くの日本製の粗製磁器を海に投げ込んだ」とあります。また、福岡県の三里松原の岡垣浜など玄界灘沿岸でも大量の肥前磁器が採集されています。

岡垣町に隣接した芦屋町は、江戸時代には芦屋商人（筑前商人）が盛んに商業活動を行っていたところです。芦屋商人は肥前磁器を大量に仕入れて、全国に筑前焼と称して売りさばっていました。当然、伊万里商人との関わりも深く、伊万里市立町の天満



調査員が調査準備を行っている風景
(鷹島海底遺跡分布調査)

宮に寄進された石鳥居には芦屋商人の名が刻まれていますし、芦屋町の神武社の石灯籠などはその銘文から芦屋商人と伊万里陶器問屋が、共同で献納したものであることがわかります。岡垣浜で採集される肥前磁器は伊万里と芦屋を結ぶ海路上か、芦屋から全国へ船出する際に、何らかのアクシデントが起きて遭難した際に船ごと沈んだか、積み荷を投棄したことによるものと想像することができます。

(3)水中考古学と有田焼

しかし、浜に打ち上げられる磁器片からはその遭難時の状況を想像することはできても、実際の姿はわかりません。そうした海中の状況の具体的な姿を探る手段の一つが、水中考古学というまだ聞き慣れない名の学問です。水中で調査を行うという調査環境は特殊ですが、陸上の考古学と目的や方法論に違いがあるわけではありません。むしろ同じと言ってよいでしょう。

北部九州では元寇ゆかりの長崎県鷹島海底遺跡などで九州沖縄水中考古学協会が継続的に調査を行っています。今年も6月30日～7月2日に分布調査が行われました。

1988～1989年の調査では19世紀前半ごろの肥前磁器が出土しています。江戸時代を通して有田焼を積み出していた伊万里湾の海底には多くの焼き物が眠っているでしょうし、有田焼が運ばれた海上ルートにも流通の痕跡が残されているものと思われます。まだ今のところ有田焼に関する水中遺跡が本格的に調査された例は知りませんが、今後の有田焼など肥前磁器の研究にとって、十分活用できる有意義な資料が得られると思っています。特に生産地と消費地を結ぶ流通に関する問題の解明など大きな可能性を秘めています。(野上 建紀)

染付有田皿山職人尽し絵図大皿

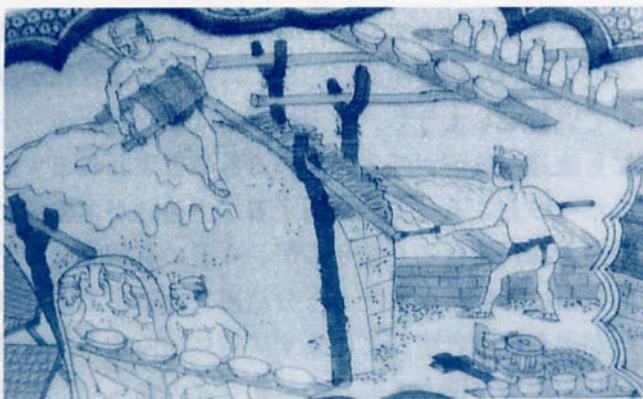
5 素焼き

成形を終えた素地を十分に乾燥させてから「素焼き」を行います。素焼きとは本焼する前に約 800度であらかじめ焼いておくことです。そして、絵付けや施釉の工程も素焼きの後に行われます。

現在の製品はほとんど素焼きされたものですが、有田焼が始まったころは素焼きは行われず、生の生地にそのまま絵付け・施釉する「生掛け」と称される方法でした。発掘調査などの結果では素焼きは17世紀中ごろに始まり普及したとされています。もちろん素焼きはその分コストがかかりますので、器種や品質によっては生掛けも続けられました。

次に素焼きの利点を挙げると、まず素地の中の水分が抜けることで本焼きにおける失敗を減らせますし、また失敗を未然に防ぐことができます。それはより薄くシャープな形をつくることも可能にします。そして、素焼きした素地は生の素地に比べてある程度吸水性をもっていますから細かい絵付けには適しているようです。

そして、素焼きの方法ですが、本焼を行う登り窯とは別に素焼き窯で焼いていました。また、登り窯の一室（最上室）を利用して素焼きを行った例が明治時代以後には見られません。登り窯の一部で素焼きを行う方が経済的のようにも思えますが、江戸時代は登り窯が共同所有であったことや工程手順を考えると、細工場などの工房付近にそれぞれの素焼き窯があった方が都合がよかったのでしょう。



染付有田皿山職人尽し絵図大皿の素焼き

寄贈資料紹介

- ◆ 陶磁器資料 1点 南原 田島 商店様
- 1点 南山 柿右衛門窯様
- 3点 堺市 関 和男様
- 16点 岩尾磁器工業株式会社様
- ◆ 民俗資料 65点 上幸平 手塚 信雄様

ありがとうございました。

町内古窯跡発掘調査

資料館の夏の恒例行事、発掘調査が始まります。小物成窯跡（南原）と天神森窯跡（南原）を予定しています。調査員をお見かけになったら、気軽に声をかけてください。



皿山雀 (さらやますずめ)

人事異動で4月から町並み保存対策課へまいりました。知性や教養といったことに無縁の私は、資料館で仕事ができることに大なる憧れと希望を小さな胸に抱いてやって来ました。しかし現実には、ただチュンチュンとさえずり、パタパタと羽ばたいているだけ。来年の今頃は皿山のカチガラスぐらいにはなれるでしょうか。(る)

皿山びとの歌

有田町歴史民俗資料館報 No.30

発行年月日 * 平成7年8月1日

編集・発行 * 有田町歴史民俗資料館

〒844 佐賀県西松浦郡有田町391番地1
☎0955-43-2678 F A X 0955-43-4185